

韓國農謡の問題

任 東 権

農耕作業にともなう歌を、ここでは農謡とよぶことにする。農謡には田植歌をはじめ、草取歌、山有花歌、打麦歌、田踏歌、田鋤歌、塊打歌、土堅め歌、棒打ち歌、糲落し歌、稻刈り歌、草刈り歌、重荷負い歌などがあるが、これらの中でも、田植歌が一番ひろくうたわれている。

田植歌といつても田植えするときにだけうたうのではなく、なお分類すると、苗取りの時や田の草取り作業の時にもうたわれている。苗取りの時にはメロディーや詞が、多少ちがつてくることもあるが、ほとんど同じ日に行われるので、同じ歌をうたう場合が多い。

田植は時期を以ては、秋の収穫に影響があるので、一時に労働力を必要とする。それで農村では村人が総出になつて、共同作業を行う場合が多い。この様な集団作業をトレと言ふ。トレは村ごとに組織されるが、この時に二十歳になつた若者の成年式も行われる。すなわち、若者が村の先輩達に酒をおごると、成年した者として認められ、成人と労働力を交換することが出来る。もし酒をおごることが出来なかつた場合には、二十歳をすぎても、なかなか認めてくれないので、大人と労働力を交換することがむづかしい。

トレには家毎に一人ずつの男の労働力を出しあって集団で作業を行ふが、男の手がない場合には、婦人が食事準備に参加するのが一般的ならわしである。トレには農樂がつきもので、士氣をたかめ樂

しく謡いながら、作業をさせる。共同作業の収入は参加した者の貢金として払い、一部は積立てておいて、村共同の基金として、建設や福祉金として使用する。

農謡は朝早くから、夕方おそくまでうたわれる。先ず朝早く食事をすませて、一同が田に行く時に、村の総代の家に掲げてある、村を代表する農旗の下にあつまつて、農樂をかなでながら、行列をつくつて作業の現場に行く。この時には歌はうたわないが、しかしメロディーは農謡のメロディーの一つである、行進曲である。現場につくと作業と共に、農謡がうたわれ、農樂はそれを伴奏する。また、農樂は作業の始めと終りの信号もし、作業をはやめたりゆるやかにしたりする、合図も行う。いつたん作業にはいると、農樂が集団員の行動を統制する機能をもつようになる。一つのたんぽの仕事がおわりかけると、ピッチをあげるためにせつからにならし、皆の疲れがみえるとするやかにかなでる。夕方になつて仕事がおわると、朝のように農樂の演奏によつて行列して家にかかる。

農耕作業のときにはうたう農謡の内容は色々とあるが、次の様にわけられる。

一 恋

農謡には恋の歌がいちばん多い。人間は成人になると本能的に異性をもとめ、心から生命をかけて恋するようになる。こうして人類は繁殖してきたのである。農謡のうたい手は同年輩たちの年齢集団の場合が多かったし、お互に息があつて、恋をうたうようになつた。農耕作業は主に男の仕事であつたので、恋の相手はとなりの乙女であり、村の美人であり、時には妓生を恋することもあつた。しかし、これらとの恋は結ばれる可能性のない場合もあつたが、結ばれないだけに、切ないものであつた。

韓国には、愛の歌、相思歌、二八青春歌とよばれる歌が多い。お互いに恋をうつたえてなぐさめたり、恋しながら、社会的な身分の相違や階級の問題で結ばれないので、悩んだりすることもよくうたわれた。二八青春とは、十六歳のことと、もう十六になると異性を意識して、恋したくなるものと思つたのである。この様な恋のうつたえは、農謡では何の飾りもなく、ありのままの姿うたわれたのである。

垢にまみれし
わが恋よ
誰れを悩ますか
瞳の美しさ

せせらぎの響も妙に
いざや結ばん草の庵を
水清し

そはやすけれど
なれを慕いてわれは切なし

もの静かなる乙女よ
長い峙をうちこえて
行き来に見するその姿
男子の心悩ますか

垣の内に花を植え
垣の外にたれさがる
道をゆく若き殿子は
花に見ほれて過ぎかねる

彼方のみねの上
いまだみぬ星ひかる
そは待ちこがれし君の
いでのしの光か

月が昇る 月が昇る
枕元に月がさしこむ
月が昇り花咲く部屋に
遊んで行きなされ

昨夜の月は
西山にかくれ
今宵の月は

そなたの部屋に宿るそなた

灯を消してやすもうにも
君恋しさに切ない思い
夜があけて尋ねて行けば
花が迎えてくれるよ

宿の庭の青柳

ブランコにのる乙女よ
手をしばし休めて
焦がれるわたしをみてくれよ

朝露の葉烟に
瞳美しいあの娘
誰を惑わすためにか
艶がある

尚州の池のそばで

蓮をとるその娘
蓮はとつてやるから
おれの願いをかなえさせてくれ

はにかみほほえむそなたを
見おうさぬうちにはや黄昏
この夜が明けたら
また見られるものを

ともしびを明るくして

君の部屋に

わたしも一緒に床に入る

そのともしびは誰が消すのか

恋すれば相手はみな美しくみえるものである。今日、日が暮れると、明日またあえるが、それでも恋するがゆえに、夜通しまちこがれるのが恋である。恋人と共に一つの部屋でやどりたいし、蜜柑や柘榴が一つの枝に実が二つなるように、自分たちも仲よく一つ枕で床に入りたいものである。

恋は單なる本能的なものではなく、それ以上の憧れと渴望があるので、なお熱く尊いものである。この尊い心の悩みを農謡にうつたえている。

若い農夫の願いは、そうたやすく得られるものではなかった。李朝時代には男女の自由な交際はほとんど許されなかつた。「男女七歳不同席」と言つて、男女が七歳になると、席を同じくしないで別別にした。それで若い男女がつきあう機会は、社会的に封鎖された。禁止されているだけに、恋を願うのぞみははげしかつたし、そのような切ない望みが、農謡にもうたわれるようになった訳である。恋をはずして農謡を考えられない程、農謡の中には恋がうたわ

れてある。遺憾なく、そうして素朴に、よく恋をうたって来た。愛する人の心は今も昔も、士族も農民もみな同じであったのである。

二 休息

農耕作業は熱い太陽の下で行われる。六月中旬から七月一杯は、稲作にとって一番重要な季節である。七月の炎天の下で田の草取りをする。田植えも草取りも腰をまげて、はたらくので、すぐ腰がいたむ。それに太陽はカンカンと照って背中を暑くし、稻葉は腰をかがめた人の目を刺すので、二重の苦痛がある。働いて疲れた人は早く休息を願う。休息は何よりの楽しみであり休みになる。それで農謡で休息をとりたい心をうつたえている。働くかない人も休みたいものであるが、炎天下で働く農夫たちは、休むことによつて仕事から解放され、楽しむことが出来るので、休息は誰でも望むものである。あまり休みすぎると、仕事がはかられないが、それでも休息は望ましいので、休める幸福さを歌として、よくうたわれた。

仕事のつかれを忘れさせるために、農楽を奏でさせてはいるが、それでも休息がほしいので歌のなかでよくうたつてきた。

遠い人に聞きよいよう
そばの人見やすいよう
鼓の調子にのつて
植えてやろう

冬の木枯にも
温おん突つでくつろぐのは

人生のまたとない楽しみだ
オホヤ サンサテヤ

緑柳芳草の夕暮に
西の風さつと吹く

ホミを肩に口笛を
オホヤ サンサテヤ

乙女のくれた煙管は
煙草の味もようござる
乙女の手並のすばらしさ

三斗落さんとの田が
三日月ぐらい残のこったぞ
手早に植えて
みんなで家に帰ろうよ

今日あつまつた友達
日が暮れるとみな散る
三尺の手拭首にかけ
明朝また会おうや

日が暮れたよ
梁山に日が暮れたよ
にっこり笑うわが子に

あえる日が暮れたよ

高大広室すばらしい家で
好衣好食するのは
人生のぞましいもの
われらも休もうや

休むことは仕事からのがれることである。田の近くの木陰で休むか、土手で休むのがふつうであるが、歌ではもつとすばらしい休みをうたっている。

田の仕事がほとんど終りかけて、三日月位にすこしあがく残つていい時に、気勢をあげる。休むことが出来るからである。仕事が終つて夕暮に家に帰る人の足は軽い。家族と共に休めるからである。微笑む子供とたわむれ休み、一日中一緒にいたらいた友達とわかれれるが、明日の朝はまたあえる楽しみがある。

休む時には友達と愉快にあそぶのもよい。うたごえが遠くの人の耳にまで聞えるように、また、そばで見る人もたのしいように、よく遊び休みたいものである。休みのうたによく高大広室とか好衣好食の言葉が出る。だれでも立派な家で暮したいし、またよい着物をきてよいご馳走にあずかりたいものである。この様なのぞみがあつて、人間はいつしょけんめいに働くものである。農夫たちは家族と共に楽しむため熱い炎天のもとで、働くのであった。

くたべることによって健康を保ち、多くのはげしい労働にもたえられる。したがつてよく働くためには、良くなべなければならない。労働は消化を促すので、肉体労働をする人達は多量をたべるようになる。農夫達はよく食う。ふだんは一日に三食であるが、野良ではたらく時には一日に四食になり、その合間に酒をのむことになるので、一日五食にもなる説である。腹が空くと仕事をすることが出来ない。腰の力が抜けてしまつて仕事がはかどらないので、お腹がすかない様に、多くたべるのである。

また、食べる時は仕事を休むことになる。食事には休めるのではなくおまちこがれた訳である。それで、農耕民謡のなかには、旺盛な食欲があらわれ、田の主人の家で、食事のかごを頭にのせて来るのを待ちこがれる歌が多い。早くお腹をこしらえ、また、休みたいからである。

中食を待ちながら、果して今日のおかずはなんであろうかと、想像する楽しみがある。大食家であるうえに、うまい物を食べたいからである。よその家では、もう食事が出たのに、自分の主人の方はどうしておそいのかとなじつて見たり、美味しい魚や肉や野菜を想像しながら、仕事をするのも楽しみである。

南山の麓道

お昼がおそくなつた

芹やほうれん草

味をつけるのに手間どつた

三 食

生きるには先ずたべることである。くわづには生きられない。良

嫁三人

味をつけるのに手間どつた

踵のすり切れた草履を

ひきずるために手間どった

都の乙女さん

おひるが遅いよ

三代独子のお子さん

お乳をのませるために遅いとな

今日のおひるの

おかげはなにやら

金羅道の鯛が

一匹半も添えてある

急いで炊いたご飯は

粒も石も多いもの

それはそうよ

妻がいないからよ

程よくくほんだ甕に

こうじを入れたお酒は
花を摘んで盃へ
お互いにすすめよう

このお酒お飲みになれば

老いないとや

盃になみなみと

君とかわそや

家内はどこに行つたやら

嫁ごのお給仕

よいおかげは

婿の膳にのせてある

乙女の小屋の蓮の池

とびまわる鯉を

刺身にして酢をつけて

その乙女と盃をかわしたい

農夫たちは食欲旺盛であるので沢山たべるし、どうせたべるなら美味いものをたべたいし、それに酒ものみたいものである。食事のおそい理由として、味をつけるためであり、子供に乳をのませるために、踵のすれた草履をひきずるために、たとえたのも面白い。また、よいおかげは皆な婿の膳にもつていかれたのは、妻がいないからであり、娘は嫁に行くと父よりも、自分の夫の味方になってしまふ。人情を諷刺したのも素朴である。食を願う時にも女のことをよく歌っている。農耕作業はほとんど男性集団で行うが、おひるの食事には田の主人の女性の家族か、または村の女性が、頭の上にカゴにのせて来る場合が多いので、男性集団のなかに女性が登場することになる。それで、食事の時にははりきり元気が出し、食事を待ちこがれことになる。また、美味しいものを一人でたべるのは物体ないので、村の乙女と共にたべたならどんなに良いことであろうと想像するのであった。それで、食事はなお樂しいも

のであった。

四 遊び

人間はだれでも生の歓喜があふれ、幸福に暮したいと願う。先ず健康であり食うに困らないし、世のことが意のままになると人生を謳歌したくなる。

昔から「五月農夫 八月神仙」と云う諺があった。陰曆の五月になると田植えがはじまるので、一生懸命に働くが、その甲斐あって、八月になると神仙のようになると云う、意味をもつてゐる。暮しが樂になると、何も羨やましいものがない。かえって皆んなが、自分を羨やましく思うようになる。道教では神仙を最高の理想としたので、あせを流しながら働く農夫も収穫期になると、神仙になるので、最高の望みを達することになる。

幸福であることは、人事を尽して愉快に暮せることが出来るときには、得られるものである。愉快に暮すためには、楽しく遊べることである。心から遊べるには、周囲の条件がかなえられて得られる。悲しみやうれいがない時に、はじめて愉快に楽しむことが可能である。

青空の雲をあつめ
万人の休み小屋

玉楼の神仙は
碁盤を前にして
のびやかな

世の流れも氣につかぬ

お月様よ明るいお月様よ
李太白が遊んだお月様よ
誰と遊ぼう明るいお月様

扇をあげるよ扇をあげるよ
ソウルの両班も扇をあげるよ
侍女やみななのもの
扇上げを見に行こうよ

熊川の天子峰

花咲いて花山でござるか
それは花でなく
熊川殿様の別宅でござる
ふわりと浮いた白雲は
どの神仙が お乗りやら
お酒をたっぷり 盛つて
菊の亭に遊ぼうぞ

花を摘んで髪にさし
都をかえりみよう
山に登つてながめれば
万古の美人はわたしだけ

黄色いチマの娘

足ごとに香あり

馬に乗つて花�行けば

足ごとに香あり

南の窓北の窓あければ

九月の紅葉花の山

花畠には蝶がとび

蝶の中に童子が遊ぶ

明沙十里白浜を

花を見ながら通り行く

お花よ歎くなけれ

明年三月またくるぞ

この田を植え終えて

帽子に花を飾つて

踊りながら

たずねて行こう娘の宿に

この様な歌は作業をしながらうたい、また農民の祝祭のときによく歌う。農民たちの祝祭日は多い。歳時風俗の初耕日、流頭宴、百中宴、秋夕などがあり、春秋の花柳もある。

年の始めか二月の一日に牛に鋤をかけて、田畑を二三畝ほど耕すことを初耕と云う。この儀式によって豊作を試みることになる。初

耕は日出たいので酒をのんで、農樂をかなでながら愉快に遊ぶ。六月十五日は流頭節である。女性は東の方の流れに行つて髪を洗い、菖蒲湯で髪を洗つたり水浴びを行ふが、農夫たちは農樂をならしながら興じ遊ぶ。祖先の位碑に果物の薦新も行う。夏盛りの最中であるが一日を愉快に遊んで暮す。この様にして仕事のつらさを忘れ疲れをいやしてきた。

百中は百種とも云うが、陰の七月十五日のことで、日本の盆にある。農耕作業もほとんど終つて、あとは収穫をまつばかりである。それで一日をのんびりと、遊んで暮すことが出来る。農家では作男に小遣金をたっぷりやつて、一日休ませる。作男たちはその金で酒をのんだり、市場に行つて買物をしたりする。時たまには村中の男達が、山とか渓谷の景色のよい所にあつまって、農樂をならしながら興じる。

秋夕は陰八月十五日のことで、三大名節の一つである。一年中で月が一番明るい日である。満月をむかえて豊年をよろこび、炎天の下でよくはたらいた甲斐を感じる時期である。新米で餅をつくったり酒をつくって、祖先の靈前にささげてはのみ、農樂をならしながら、愉快に遊ぶ。暑くもない寒くもない一番よい季節であり、豊年のよろこびにあふれるので楽しく遊ぶことが出来る。

この様に農民たちは、歳時風俗を通して、昔は慣習にしたがつて休み遊んだのであるが、これらの遊びには何時も歌と踊りはつきものであった。歌と踊りがあつて、愉快な心と生活は表現化された。遊ぶことによつて人生を楽しみ、芸術をも生むようになった。

五 性

農耕作業は若い男性集団のしごとであるので、性活動や性衝動の旺盛な人達のあつまりであった。かれらに共通性の問題を、かれらだけの集団であるので、共感をもってうたう様になった。

民謡の歌い手は農民たちである。したがって高い教養や芸術的な洗練よりも、欲望を反射的に飾らずに率直にうたう、素朴性があつた。教養を保つために、心をにごらしたり修飾はしなかつた。思うがままをうたつたのである。民謡の純真さはここにあつた。恋と云うよりも、性的な衝動や欲望を、率直にうたつた民謡の野性は人間の心の原型でもあろう。農耕作業を男女共同でやる場合には、しづけさを保つために、歌言葉も洗練された歌をうたつたが、同性集団だけの場合にははばかることがないのでしつけよりも率直な欲望のあらわれがあった。性の楽しみを回想したり、想像したりしながら、露骨な表現をもいとわずに、心をうちあけて性をたたえた。この様な農謡は、量から云つても随分多く、みだらであると云うよりは、かえつて微笑ましい所があつた。ここに、民謡の野性と芸術性があつたのである。

白い花は嫁とりに
赤い花は付添いに
人々よ笑うなよ
あとづぎがほしいんだ
俄雨があると知つていれば

誰が着物を干そつか
君が帰ると知つていれば
戸締り堅くするものか

音やかましい格子戸
誰のためにあけておく
若い後家さん
お入りなされ

六月のあかつきに
乙女二人谷道を行く
三尺の手拭首にかけた
若者一人がついて行く

晋州の菜田に
草をとる乙女よ

柳腰の美しさ
寝床の味はすばらしい

星が輝く星が輝く
枕元に星が輝く
花が咲く花が咲く
布団の中に花が咲く
君と共に寝たあとは
うすら寒さにおそわれる

うすら寒いその時は

渋桃がよいもの

ここにさしそこにさし

奥様のそこにさす

さしたもの

日陰なので育つやら

六月になつて

妾を売つて扇を買つた

冬になると妾恋いしさに

たえられぬ

性の歌には切ない悩みのうつたえもあれば、たわむれもあり、調

子はずれのみだらさもあつた。民謡の面目を遺憾なく發揮してい
る。美しい人を愛したいし、愛の次の段階になると現実的なセック
スの欲望におそれた。これが、かなえられない所に悩みがあつ
た。彼女を待ちこがれて、戸を夜通しあけておく様や、乙女二人の
あとを若者二人がついて行く様はほほえましい。秋の収穫で妾をか
つたものの、夏になると暑いので妾よりも扇が必要になり、妾をう
つて扇をかつたが、冬の長い夜になると、また妾が恋しくなる男性
の非情があつた。しかしよくも率直にうたつたものである。教養の
ある人には、思いもつかない世界を大胆にもズバリと歌つた所に、
民謡の味があつた。

逢うよろこびよりも、別れる離別をうたつたのが韓国民謡である。
われわれは一生を通して別れを何度も経験する。引越したり、旅行
したり、嫁に行つたり、または死別するなど、別れなければならな
い場合が、なんどもあつた。また昔は科挙にうかるには、書院や山
寺に行って勉強したり修業をしたので、この様な時にも、お互に
別れていなければならなかつた。この様な別れは、人情深い韓国人
にとって辛かつたし、心に深くきざまれる様になつた。

逢うよろこびの歌は少ない。しかし別れをうたつた歌は多い。離
別歌と云つて、別れる心のつらさを歌つた一群のうたがある。名称
もそのまま離別歌である。一生をくらすには、発展のために、一
所にとどまらないで、別れなければならない事情もあつたし、特に
嫁に行くための別れは、女性ならば誰でも経験するものであるし、
死別は誰でも運命になつてゐるが、これらを当然のものとして、諦
めないで、歌として離別の感情をうつたえたのである。

暮れるまで働いて
どの巣に帰るやら
風のようない人者
包丁のように鞘がない

日暮れの道を
少女が泣いて行く
おさない弟をつれて

六 離別と孤独

泊る宿なくないで行く

この山あの山谷間で
ほととぎすの声悲しや
お国はどこやら
谷間でなくぞや

屏風の鶏が
羽ばたき啼き

枯木に花咲けば
そなたは帰るやら

南山の麓に

約束草をうえたが
咲いた花は

日暮れの道を
どなたかないで行く
かわいい妻子を亡くして
悲しさにないで行く
離別の草で一ぱい

別れたあとは孤独があった。孤独があるので別れはつらいものであつた。生のよろこびは愛する人と、一緒にいることであるが、別れてしまふと、その欲びはなく、たださびしい孤独があつたので、離別をかなしく思うようになった。

人生最高のあわれは寡居であると云われている。動物でも相手はあるものであるが、豊かな情緒をもつ、人間が孤独であることはつらい。なお李朝時代には、早婚であつたし、不幸にして夫に死なれても、再婚出来なかつたので、青婦婦人があつた。二十歳前の後家さんもいて、一生孤独にくらして、操を守らねばならなかつた。この様な孤独は悲劇であったが、社会制度はそうあるべきこととして要求したのである。

屏風にえがかけた鶏が羽ばたき啼くはずがないし、蒸した豆に芽が生えるはずがないし、枯木に花が咲くこともありえない。死別して再び会えない所に孤独は、なお一層身にしみるものがあつたので、民謡で離別と孤独は、よくうたわれる様になつた。この様なかなしみが、農謡にまでしみこんで、作業をしながら離別のつらさと、孤独のさびしさをうたつたものである。

都に行つた陰士さん
うちの人に会つたの
かえっては来るものの
七星板にのつてお帰りよ

七 農を讃える

農者天下大本であると云われている。すなわち、この世を生きるために、生産することによって、食うに困らない様にすることであるので、農者のすることは、天下の大本であるとしたのである。現代では多くの職業に分化されているが、昔はほとんどが農業生産者であった。したがって、生産者としての誇りをもつて、農者を天下の大本とした農耕民族であった。

韓国の農村には村毎に村を代表する農族があった。十五メートル位の長い竹竿に、龍をえがいて農者天下大本と書いてある。村集団の祭りや行事、たとえば山神祭りやソナン祭り、別神祭などの洞祭や、トレの様な共同作業の時には、この農旗を立てて村の象徴としている。旗の頂上には雉の尾を飾る。農旗を村のシンボルとしたことは、農者の誇りであり、農者をたたえることでもあった。

昔から士農工商と云われて、階級意識がつよかつたが、高官をやめた人でも儒学者も、商工にたずさわることは恥としたが、農業には従事した。すなわち、農業は賤しい職業ではなく、生産する誇りある職業であって、如何なる身分の高い人でも、当然たずさわるべきであると思ったのである。農業生産は人間の本分であり、また、誰でも生産にはたずさわって、自分が食うだけのものはもちろん、人の食うぶんまで生産して、奉仕すべきであると解釈してきた。生産と奉仕の二重のよろこびが農夫にはあったので、自からたたえるようになつた。

山野に月明るく

舜帝のお仕事よ

五六月の夏盛り

農夫の季節でござる

東の峰にのぼつた日が
西の山に沈んだよ
この田に苗うえて
よく育つて栄光あれよ

わが百姓たちは
凶作になるか心配やら
若い後家さんはお子さんが
病になるか心配やら

春にはツツジの花咲き
秋にはみな稔る

肥えたこの大地
おれのほかに誰が守ろう

日の出から暮れるまで
汗をながして働いて
よい収穫あげようや

万民の幸福であり
天下の大本である

教民火食するには 農のほかにまたあろうか

四海蒼生農夫らよ
一生の苦労うらむなよ
士農工商さだめられて
尊いものは農である

農は國の基でもあった。社稷壇をまつるのは王の職分の一つでもあつたし、先農壇で田植えもした。農作物が豊年になつて、國民がよく暮し國もゆたかになるので、王は農に関心をもち奨励した。農夫は讃えられ、また、自からたたえることによつて誇りとし、五月炎天ではたらいた甲斐があり、慰安をもとめた。

農村の歳時風俗のなかにも、農夫をたたえたり誇らしいものとする行事がある。お盆の時や秋夕には、農夫たちがあつまつて、農樂をならしながらよく遊ぶが、その年に出来のよい家の作男をえらんで、牛にのせて村中をねり歩きまわつた。すなわちよく働いて、農作をもたらしたので、そのほうびとして、牛にのつて村をまわる光榮があたえられるのである。えらばれた作男は、名譽あることになり、来年の作男の賃金をきめる時に、高く評価されるようになる。また、上元の時にも牛遊びと云つた民間芸能があるが、これもやはり、よく働いた作男を牛にのせて、表彰する形である。この様に、農夫は自から誇りをもつてゐたし、天下の大本として、ほめたたえられて來た。

八 孝

基督教では、身体髪膚は父母からうけたので、孝行することは百行の基本であるとした。父母はうんだだけなく、育てくれた。成人になるまで育てるには、なみなみならぬ誠意と苦行があつた。しかし、父母はそれをいとわないで、しんぼうして育ててくれたのである。したがつて、父母に孝をつくすべきであり、感謝の心をもたねばならないものとして來た。

孝は基督教からはじまつたのではない。それ以前にも、人間が孝行する考えはあつたものと思われる。原始時代においても、乳をのませてくれたり、猛獸や敵から守ってくれたり、生存のために知恵をおしえてくれた父母に対して、依存と尊敬と味方する人情があつたものと思われる。この様なものが積みかさなつて、祖先や父母に対する孝行や、その恩に報いるべきであると云う倫理がなりたつたのである。

歳時風俗に於ける名節の行事には孝とつながるものが多い。歳拌や茶礼や墓参りがそれである。お正月や秋夕には、多くの人が故郷にかえるが、祖先の靈に茶礼を行い、墓参りをするのが目的である。墓参りをしないとどうも心がすまないのは、孝に対する長い慣習からくるものである。孝を全うすることは、人間の本分を尽したものになるので、このような、倫理觀は農民たちの心にもあつたのである。

叢は
朝露で首さげる

父母の前では

盃もって首をさげる

そら農夫らよ

お聞きなされよ

お國に貢税すませて

父母に孝養忘れるな

田植え刈取りすませて

上には聖君たてまつり

父母には孝行

妻子を養うや

この田に苗植えて

榮光である

父母のお墓に松植えて

榮光である

心ゆくまで見ずに黄泉に行く

七十の父母をおいて

黄泉に行くおれよりはましだ
肥えた田でとれた

よい米は
父母のご膳にさしあげ

祖先の祀りにもさしあげる

家庭や社会において、孝は秩序であり倫理であった。炎天のもとで働いて、とれた米は先ず父母のご膳にさし上げる心構えがあった。妻子はそのあとであった。現代人とは逆の倫理觀があつた訳であるが、孝を第一としたからである。

現代人はよく、父母を自分と同じ水準で考える傾向があるが、農謡にあらわれた彼等の考えは、父母は絶対的であった。朝露で草が首をさげている様に、子等は父母の前では盃をささげて首をさげた。この様に孝は心からにじんだものであった。

農民は知的水準があさいのが一般的であり、したがつて儒教の教理にもあまりかかわりがなかつたが、彼等のモラルには孝が徹底していた。農謡のほとんどが孝を讃え、不孝をなじつてゐる。このような孝思想は、農村でよくみられる孝子碑や、孝子旌門をのこすようになった。

九 結び

韓国民謡のなかで農謡の主題の分析を試みた。農謡の共有層である農民たちは、教育や教養はひくいと云うものの、豊かな情緒をもつて、人生をうたい訴えて來た。生のよろこびを歌い、苦痛や悩みを歌つて、人生の喜悲哀楽を遺憾なくうたつて來た。彼等は教養ある人のように心をかくさなかつた。思うがままに率直に歌つて來た。それで民謡は民衆の生活と心を代表した庶民詩歌として、尊いものとなつた。

民謡は単純で垢のついていない人間の心の映りである。飾りのな

い素朴な姿である。社会の下層におかれて來たが、いつも希望にみちており、心ゆくままに良くなつたつて來た。民謡は個人のものではなく、集団のもの万人のものであるのでとがつた角がない。多数に共感をあたえて來た。その集団の一員であると、誰でも心を打つ程の力と誘いがあつた。それで、民謡は皆が進んでうたうようになつた。

韓國農謡には韓國農民の心と生活が映されてある。仕事のあいまに心をうつたえたからである。ある意味では、詩人の作品より尊いものとしてあつかわれるはそのためである。なんとかして、物質文明のなかでも、末永く、純真無垢な民謡を保ちたいものである。

(いん　どん　ごん・韓國中央大학교)